



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A Phenomenological Study of Transformation through Forest Bathing
Author(s)	張, 宜欽
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16811号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16811
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99656
Type	doctoral thesis
File Information	ZHANG_Yiqin_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：張 宜欽

審査委員	主査	准教授	渠 蒙
	副査	教授	エデルヘイム・ヨハン・リチャード
	副査	教授	上田 裕文

学位論文題名

A Phenomenological Study of Transformation through Forest Bathing
(森林浴による自己変容経験に関する現象学的研究)

本論文は、森林浴（Shinrin-yoku）という実践を対象に、観光体験を通じた自己変容がいか
に生起し、持続的な意味形成として定着していくのかを、現象学的手法によって解明すること
を目的とした研究である。特に、既存研究において支配的であった「非日常的・特別な体験を
契機とする変容モデル」に対し、反復的・日常的な実践の累積によって生じる変容を理論化し
ようとする点に、本研究の独自性がある。

本論文は、理論検討、実証分析、そしてそれらを踏まえた再理論化という三段階構成からな
り、「理論—実証—理論」という往還の構造を意識的に採用している。理論的貢献の仕方として
独創的かつ説得力を有している。

一方で、口頭試問における質疑では、Research Question (RQ) の提示と扱いについては改
善の余地があることも指摘された。サブクエスチョンが徐々に「問い」というよりも「分析対
象」の提示に近づいている箇所があり、結論部において当初の疑問に明示的に立ち返る構成が
やや弱くなっている点である。結論において再度「疑問—応答」の形式で整理されていれば、論
文全体の論理的完結性はさらに高まったと考えられる。ただし、これらは主として表現と構成
上の問題であり、研究の核心的価値を損なうものではない。

本論文の理論的貢献は、自己変容を「瞬間的な内省の結果」ではなく、「経験の反復と意味の
累積によって形成されるプロセス」として再定義した点にある。特に、新現象学における「雰
囲気 (atmosphere)」概念、さらにはドゥルーズの時間論を援用しつつ、変容を無意識的・漸進
的な生成過程として捉えた点は、観光研究に新たな理論的地平を開くものである。

口頭試問における質疑では、「アイデンティティ」概念の扱いについて重要な指摘がなされた。
本論文では、アイデンティティを、経験のフィードバックとして生じる語り（ナラティブ）に
よって構成されるものとして理解しているが、アイデンティティ理論には複数の系譜が存在す
る以上、それらの可能性を整理した上で、本研究がどの立場を選択し、なぜそれが妥当である
のかをより明確に論じる余地があったといえる。この点については、理論的立場の選択が一貫
しているがゆえに、明示的な整理が補われれば、議論の精度はさらに高まったと考えられる。

また、ドゥルーズ理論の援用については、メタファーとしての使用は極めて効果的である一方、その理論的位置づけがやや表層的に見える可能性も指摘された。ただし、これはドゥルーズを厳密な解釈対象とすることを目的とした研究ではなく、変容の時間性を説明するための哲学的補助線として用いている点を踏まえれば、致命的な問題ではない。

結論部においては、やや射程が大きくなり、自身のケーススタディと、それを越えた理論的可能性との区別が曖昧になる箇所が見受けられる。森林浴における没入（immersion）の議論が、他の観光体験一般へと拡張可能であることは重要な示唆であるが、その場合には、どこまでが実証に裏打ちされた知見で、どこからが理論的展望なのかを明示する必要がある。

また、モデル提示についても、「批判としては有効だが、どのように使えるのか」という問いが投げかけられた。本論文のモデルは、既存パラダイムを再考するための概念装置としての性格が強く、その点をより明確に位置づけることで、フレームワークやパラダイムとの差異はより理解しやすくなったと考えられる。

さらに、トランスフォーメーションと一般的な「成長」や「変化」との違い、ならびに自己変容を理想化しすぎているのではないかという批判への応答についても、結論部で明示的に整理されていれば、議論は一層引き締まったと考えられる。

以上を総合すると、理論と実証を往還させながら、観光体験における自己変容を新たな視座から捉え直した本研究は、独創性、学術的貢献、方法論的妥当性のいずれにおいても、博士論文としての水準を優に上回っている。よって、本審査委員は、張氏に対し、博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。